

日本統治期台湾文学における「女性」イメージの機能性

張 文薫

はじめに

第1節 「恋愛」の重み：追風「彼女は何処へ」

第2節 新聞小説に見られる「恋愛」と「現実」の距離：「争へぬ運命」

第3節 『フオルモサ』文芸世代：巫永福「山茶花」

第4節 「残されたもの」としての女性：張文環「山茶花」

むすびにかえて

(要約)

従来、日本統治期の台湾文学における女性像は、植民地支配及び家父長制度という二重の抑圧のもと、「さらに抑圧される者」ないし「虐げられる植民地・台湾」のメタファーとして捉えられてきた。但し、このような性差別的な女性像とは別に、〈新しい女性〉及びそれに関連する〈恋愛〉を描いた作品の系譜も、戦前の台湾文学に存在するのも事実である。一般的に、近代文明の浸透により形成された女性像は、封建的な女性像とは異なる斬新な形象であった。だが、台湾の作品に描かれた〈恋愛〉と〈新しい女性〉は、必ずしも近代的なそれとは限らない。本稿では、台湾社会の近代化の担い手である男性作家の作品を検討し、時代に沿って変化する「女性」イメージと、そこに潜在する男性知識人の意識の変遷を浮上させるうえに、台湾独自の「近代」をめぐる問題を明らかにしたい。

はじめに

本稿は、日本統治期の台湾人男性作家が描いた女性像について、追風「彼女は何処へ」、林輝焜「争へぬ運命」、巫永福「山茶花」、張文環「山茶花」の4作品を通して検討し、台湾新文学の発展とともに変化する「女性」イメージの機能性を究明するものである。従来、日本統治期の台湾文学における女性像は、日本による植民地支配及び漢族の伝統的な家父長制度という二重の抑圧のもと、「さらに抑圧される者」として描かれる傾向にあった。例えば、呉希聖「豚」¹や呂赫若「嵐の物語」²のように地主（資産階級）の抑圧に苦しむ小作人家庭の苦境は、その家庭の妻や娘の犠牲という形で表現される事が多い。このような女性像は、「虐げられる植民地・台湾」のメタファーとして捉えられてきた。但し、このような性差別的な女性像とは別に、「新しい女性」³及びそれに関連する「恋愛」を描いた作品も、戦前の台湾文学に存在していた。近代文明の浸透により、封建的な「家」に閉じこめられてきた女性は「歴史の地表」⁴に浮かび上がり、その過程で形成された女性像は、封建的な女性像とは異なる斬新な形象であった。だが、台湾の文学作品に描かれた「恋愛」と「新しい女性」は、必ずしも近代的なそれとは限らないのである。本稿では、台湾社会の近代化を推進した主要な担い手である留日知識人の中でも、特に台湾新文学運動の発展と大きく関わっている追風、林輝焜、巫永福、張文環の4人が、「新しい女性」と「恋愛」をテーマに、新聞や雑誌などのマス・メディアに発表した作品を取上げて、「新しい女性」と「恋愛」に対する描写の台湾新文学の形成過程における変容を解明したい。

第1節 「恋愛」の重み：追風「彼女は何処へ」

追風（本名：謝春木）の作品「彼女は何処へ」⁵⁾は、台湾新文学史上における最も初期の小説である⁶⁾。この作品は、「民族自決主義の立場に立ち、島民の啓蒙運動を行ふと共に、合法的民権の伸張を」計ることを目標とした⁷⁾、在京台湾人団体「台湾新民会」の機関誌である『台湾』に掲載された。「台湾新民会」は台湾民族社会運動の指導団体として結成されたため、その機関誌により「台湾の新文化運動の口火」が切られたものの、雑誌自身が「文化啓蒙運動」を中心としたものであり、「新文学に関する作品」は「新文化運動」の発展のために「包摂されていただけ」と見られている⁸⁾。そして作者の謝春木自身は、台湾植民地教育制度の第一世代エリートでもある。1921年、彼は台北師範学校を首席で卒業した後、東京高等師範学校へ留学し、4年間を東京で過ごした。台北師範学校に在学中、すでに社会運動に関心を寄せており、留学中には文化協会の活動に従事し、『台湾』や『台湾民報』を舞台に気鋭の論客として文化啓蒙、民族運動に積極的に従事した。東京の留学体験は謝春木に植民地知識人としての宿命を自覚させた。彼の留学体験と思想は、親友・王白淵を通して『フオルモサ』メンバーなど次世代の留学生と共有するところとなり、「留日青年」の系譜として戦前の台湾文学・精神史に大きな影響をもたらしたのである⁹⁾。「彼女は何処へ」の掲載誌である『台湾』の性格、及び作者謝春木の背景から、小説の内容に読者を啓蒙するメッセージが盛り込まれていたことは察しうるであろう。そして文化啓蒙運動色の性質を備えた、この作品のテーマが女性と恋愛、結婚制度であることから、「女性」「恋愛」をめぐる問題は新文学運動抬頭期¹⁰⁾において新知識人にいかに重視されていたかがうかがえよう。

1.

「彼女は何処へ」は『台湾』第三年第四号から第七号にかけ、四回に分けて連載された。構造的には五節に分かれている。連載第一回は「一、待たれる入船の日」と「二、清水へ行く帆影」が合せて掲載されたが、それ以降は一回に一節ずつ掲載されている。ヒロインの桂花には、家族が決めた「内地」日本に留学中の許婚・清風がいた。「一、待たれる入船の日」では、清風の帰省を待ち焦がれる桂花の姿が以下のように描かれている。

今日は何日でしたかね。さう、試験が終わった日ですから六月二十九日ですわ。明日は30日。明後日は一日。月曜日ですから大方内地から船が入るに違ひないわ。さうしたら、きつと……。

当日、清風を迎えに港まで行った桂花の目に、従兄の草池と清風の「背後に日傘を挿した女学生」の姿も同時に映った。しかし清風に心を奪われた桂花は、彼女の存在について「気遣しい」と感じながらも、「どうか全然無関係の人か或は草池の友達」と自らを納得させたところで「一、待たれる入船の日」は終わった。しかし、そのすぐ後に続く「二、清水へ行く帆影」で、清風と台北市内の名所をデートしている例の女性が登場する。この女性に関して、作者は「阿蓮とは女

の名前で読者は覚えてあるだらうが甲板で後に立てゐるのは彼女だつた」と読者に語り、そして清風と彼女の親密な会話内容により、彼女の身分及び清風には日本で相思相愛の恋人がいた事実を当事者の桂花より、先に読者へと説明したのである。さらに清風は阿蓮の対話の中に、

私達が相愛するやうになつたのは桂花が私を愛するやうになつたのより古いのだ。それに桂花の方は片思だ、媒酌制度下の恐しい残酷な処女の片思です、私は此に十分に同情しますが妥協して結婚することは出来ない。

このような描写により自らの立場を明らかにしたのである。理知的な清風は前節で、「彼も屹度試験を一日も早く終了させたいと願つてゐるに違いない。帰台の日を指折つてゐるに相違ない。妾のやうに」という妄想にふけていた桂花とは対極に描かれている。

「三、戻る指輪」では、清風が桂花と結婚できないことについて、まず桂花の従兄草池が桂花の母親に、二人の婚約は清風の承諾無しに結ばれたものであることを理由に、「事後承諾は法律に限るべきことです。人格の結合を要求するものには応用すべきものではない。清風は何等恨られる所はない」と述べ、「妹は此際断然断念の方が一生の幸福だ」と説得した。母親は「聞き終ると真青になつてしまつた」一方で、「媒介者に裏切られたことや清風家の専制に対する憤怒で倒れんばかりになつてゐるが妙に清風に対して恨むやうな心が起こなかつた」。「強ひて娘の一生を苦しめるのも母としても堪え」られないため了承した。そして同時に届いた清風の手紙により、桂花もついに婚約不成立を知らされるのである。清風は手紙で、阿蓮との恋仲は桂花と婚約を結ぶ以前、二年も前からのもので、婚約は家族が「無断で交はし」たものであるとして、「家の専制」への憎しみを告白した。そしてもし桂花との婚約を履行するならば、それは「公約を重んじて形式的に無理」な結婚に過ぎないと述べた。

初めは世間体を慮って婚約破棄を拒んだ桂花であつたが、「四、病外の病」においては、「娘やそんなに悲観するものぢやないよ。そんなに己を得ない事情があるのなら早く分つたのはお前の為にと却つて幸福だ」という開明的な母親と草池の説得によって婚約破棄を承諾したうえに、東京へ留学することを決意した。桂花はさらに、

私はもう誰を怨みません。(中略) 全く社会制度の罪です、媒酌制度の罪です家庭専制の罪です。私はその犠牲になつた一人に過ぎません。兄様が言つたやうに台湾では私と同境遇に泣いてゐるものは決して少くありません。私は今それを明つきり見ることができます。私は彼等の為に此の敵と戦はなければなりません。強く、勇敢に戦ひます

と宣言したのである。そして「五、出る船」では、台湾を離れた桂花が船中で、「父母の専制」により見知らぬ相手と婚約させられたために家出をした一人の女性と意気投合し、ともに「台湾婦人の為に働きたい」と東京留学に対して希望を寄せる場面が描かれていた。さらに東京に到着して四ヶ月が過ぎた時、桂花は母親から送られてきた新聞の切抜きにより、清風との婚約破棄の件

が台湾で噂になったことを知る。これについて作者は「あんな小さいことは今彼女の頭にはない。彼女の頭には今もつと大きい問題が解決を待つてゐた」と述べ、桂花の変化と成長を明らかにした。桂花に対する社会の中傷に弁明するため、清風は新聞に手記を発表した。「桂花様の為に一言述べさせて戴きたい。先づ第一に噂にあるやうな事は全然ない事を責任を以て明言します。」に始まるこの文章には、続いてこのような内容が記されている。

虚構中傷も時には言ふ人自身の人格を疑はれることを記憶して下さい。麻痺せる社会の人々よ。先づ汝等が病を癒せ。……（中略）病骨髓に徹した社会の人々よ畜生生活に甘ずる社会の人々よ。もう、そろそろ覚めても良からう。親の強制に無理に無精にと結婚してから媒介者を呪ひ、天を恨み、破廉恥の行為も敢てする畜生生活に慣れた社会の人々よ。……

桂花のために弁護する目的で書かれたが、結果的には清風から社会全体への建言書となったこの文章により、小説は終わる。

以上が「彼女は何処へ」の大筋である。一見、ヒロイン桂花の独立心の目覚めを謳歌するような小説である。実際、「彼女は何処へ」は「男性本位から抜け出」した作品であり、「女性が伝統的結婚の枷や男性の付属的地位から解放されること」を呼号した傑作として研究者から高く評価されてきた¹¹。だが、その「目覚め」の過程を検討すると、女性の「独立心」とはかけ離れた実体が明らかになるのである。上述したように、作品の冒頭「一、待たれる入船の日」と「二、清水へ行く帆影」により、清風が婚約を破棄することはすでに暗示されている。よって読者は必然的に清風と共犯的な視点を共有させられ、桂花の反応を観察する側に立たされる。また、清風が恋愛結婚のために桂花との婚約を破棄する「正当性」は、彼の自己弁護のみならず、桂花の側に立つべき草池や母親の説得の中ですら述べられる。つまりここには「彷徨う桂花」と「正しい決断を迫る」清風・草池・母・読者の共同体という対立構造があると言えよう。よって、婚約破棄の正当性を認めて「目覚める」桂花の言動は、彼女自身が下した「決断」というより、彼女を正しい彼岸にいざなう清風・草池・母・読者の共同体による「期待」のなせる業と言えよう。この構造において桂花という「女性」の実体は空洞化され、作者の思惑を充填するための容器であるに過ぎない。実際、桂花の宣言―「社会制度」「媒酌制度」との戦いなどは殆ど清風や草池の言葉をなぞったものに過ぎず、彼女自身の言葉は存在しない。娘の婚約が一方向的に破棄されたにもかかわらず母親は「清風に対して恨むやうな心が起こらな」い反応を見せるが、これは機械的ですからある。

さらに、作品の結尾は「彼女は何処へ」の主人公であるはずの「彼女」、即ち桂花によるのではなく、男性知識人、しかも終始理知的な態度を見せていた清風の言葉により結ばれたことは、「彼女は何処へ」のメッセージ性を強く打ち出したといえよう。このような構造のもとに、作品人物は作者である謝春木の理念の結晶にすぎないのである。作者は読者に対して「彼女はどこへ？」と問いを発する前から既に答案を用意しており、桂花という女性を通して読者を「正しい」解答に導くように仕向けているのである。

2.

作品「彼女は何処へ」は1922年の謝春木が構想した婚姻改革の理想像であったと言えよう。そこには自由恋愛で結ばれた恋人達や、時勢に順応する開明的な家長、学問によって将来を切り開く台湾女性が描かれた。実際、作品の中では理想的な「恋愛」が語られている。例えば、「恋愛」は「恋なんていふものは私達の料理書にもない六ヶしい料理」「どんな名コックだつて出来つこない料理で誰でも味ふ料理」(傍点：筆者)だと述べられる。これらのセリフや、作品に描かれた台北市内のデートスポット、お似合いの恋人達、物分かりの良い周囲の態度などは全て当時の台湾社会には存在しない「恋愛」の理想形式、則ち〈恋愛パターン〉の具象化であると言えよう。そして、この「恋愛」はあくまでも理想に留まり、伝統社会の代弁者である家長の見解などといった具体的な問題は排除されているのである。桂花の周囲は従兄の草池、母親がいるのみで父親が不在というように構成され、作品からは「封建性」の権威が注意深く排除されている。また、「恋愛」とは「内地」日本滞在中の留学生により実践されたものであり、「外地」台湾にいる少女にとっては「受容」するべき理念として描かれている。清風は「私は桂花を愛してゐる、その愛と此の愛(注：自由恋愛)とは意味が違ふ」と弁解しながら婚約を破棄するが、その正当性は、彼らの婚約が親による決定であり、彼自身は承諾していなかったことにあるとされる。つまり「恋愛」が包弁結婚(婚約)に勝る根拠は、恋愛の当事者清風の個人意志に置かれているのである。家父長制から個人意志を奪取して近代的自我を確立することは、20年代の新しい知識人の目標であったろう。ここに「自由恋愛」が近代的な価値観を伝達するパイプとして機能したことが明らかになる。

作者・謝春木の意図は、前近代的な社会制度が根強く残る台湾島民に対して、近代的「自由恋愛」を掲示して啓蒙し、やがては「社会改革」を行うことにあったと言えまいか。そのためか、桂花は最初の妄想に溺れた少女から、「私達は台湾の婦人社会否一般社会に革命の烽火を放たなければならぬ」と宣言する、自らの将来のためのみでなく女性ないし社会全体を向上させようとする強い意志を持つようになったのである。これもまた、自己確立・社会改革を目的とする作者の意図が反映した作品の合理化であろう。『台湾』に発表された「彼女は何処へ」の啓蒙的意義はまさにここにあった。

第2節 新聞小説に見られる「恋愛」と「現実」の距離：「争へぬ運命」

前節の「彼女は何処へ」を掲載した『台湾』は、「台湾新民会」、「台湾青年」の機関誌であるが、1923年『台湾民報』に改変された。後に『台湾民報』は台湾島内での発行許可を得て、1930年3月には『台湾新民報』と改名、1932年4月15日からは日刊発行に至った。従来、『台湾』、『台湾民報』など「台湾青年会」系列の機関誌の発展とともに展開してきた台湾新文学運動であるが、1930年代に入ると文芸雑誌の相継ぐ創刊により作品発表の場が増加し、さらに『台湾新民報』の日刊化により長編新聞小説の連載も可能となった。その最初の連載小説が林輝焜の「争へぬ運命」¹²であった。

林輝焜は台北師範学校を卒業後、京都二中、金沢四高を経て、1928年に京都大学経済学部を卒業した台湾エリートである。林輝焜には、謝春木のような台湾民族社会運動との深い関わりは見出せないが、東郷実『植民政策と民族心理』（岩波書店、1925）、持地六三郎『日本植民地経済論』（改造社、1926）はじめ、台湾では「禁書」となった矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』（岩波書店、1929）までも所蔵していたことから、林輝焜もまた植民地の民族問題に対して大きな関心を抱いていたことが察せられるであろう¹³。林輝焜は「争へぬ運命」の執筆意図に関して、「一台湾人にして全台湾の同胞に云いたいことがある」、それは「台湾人は全てのことに関心を持つて欲しい」¹⁴ことだと述べたが、それはつまり台湾人の社会に対する問題意識を喚起したいがためだといえよう。したがって「争へぬ運命」は留日知識人林輝焜が帰台してからの四年間、台湾社会を観察した結果、記したものであり、同作品には新聞というメディアを通じて台湾人に発信するメッセージが織り込まれているのではなかろうか。社会全体に対する台湾人の関心を喚起せしめんとする林輝焜が、題材として「恋愛」を選択したことは注目に値するであろう。謝春木と同様、民族解放問題に大きな関心を抱く知識人の林輝焜が、謝の「彼女は何処へ」と同じ「台湾青年会」系の刊行物に作品を発表し、創作動機が台湾人の社会問題意識の喚起にある点も謝と一致するが、その表現方法としてやはり謝と同様なテーマ、即ち「恋愛」を描き出そうとした点は、興味深い。しかし「彼女は何処へ」が、個人の意志によって「恋愛」の成就のみならず、婚姻制度の改革までもが可能という無条件に肯定的な作品だとすれば、「争へぬ運命」の語り手はさほどに楽観的ではない。

作品の内容は以下である。金池は京都のある大学に留学中の台湾エリートである。帰省した際、親の決めた結婚に対して、「僕の結婚相手を、僕の承諾なしで、勝手に定めるなんて、時代錯誤も甚だしい！どう考えても、いやだ」「僕に、知らぬ女と結婚しろつて強ひるのは、どう考えても不承知だ……」と述べて、伝統的な結婚制度への不満をもらす。そして、家の決めた相手である鳳鶯との婚約を解消し、代わりに一目惚れした秀恵の家族に結婚を申し込み、無事に結ばれる。だが作品の後半で描かれるのは幸福な結婚生活ではなく、恋愛で結ばれた両者の破綻と悲劇であった。幸せなはずの結婚生活は、教養や金銭的価値観の差によって破局寸前に到る。金池は疲労と空虚を、カフェの女給・静子との恋愛で紛らわそうとするものの、秀恵との破綻を悟って自殺を決意する。その時、金池の前に同じく自殺しようとしていた鳳鶯が現れる。再会した二人は、元来結ばれるべきはずだったのに擦れ違うという「争えぬ運命」を嘆きつつ、新しい出発を求めて別れるのである。

金池をめぐる三人の女性（鳳鶯、秀恵、静子）はみな新教育を受け、新知識人が憧れた「新しい」要素を持つ女性である。中でも女学校を卒業し、新聞・雑誌を愛読して社会・政治問題を論ずる鳳鶯は、当時の理想の女性像といえよう。しかし、彼女は女学校卒業後すぐに家庭に閉じこめられてしまった。当時、台湾では娘を女学校に通わせられるのは中流階級以上の家庭であったため、家長は「年頃」の娘を男性と接触させないように目を光らせていた。比較的、開放的な秀恵にも、外出のたびに付き添う使用人がいた。つまり、知識人が求める恋愛対象「新しい女性」は、女子教育によって生まれたにもかかわらず、「自由恋愛」の遂行にあたっては、家庭内におけ

る封建体制の抑圧がなお存在していたのである。この点は、「勉強さへさしてやれば」、女性（桂花）が円満な婚姻を手に入れるという「彼女は何処へ」とは対極的といえよう。実際、台湾の伝統的封建体制が存在する限り、交際してお互いに理解した上で結婚するという新知識人の願望は不可能に近い。新知識人の「恋愛」の理想は、こうした台湾に根強く残る後進性によって阻まれたのである。だが、より重要なのは、理想の「恋愛」と幸福な家庭とは異なるのだという「恋愛」の実体を知識人が気づき始めたことであろう。「争へぬ運命」では、「自由恋愛」が必ずしも「心の理解し合う」事を保証するのではないことが示されている。例えば、金池の「一目惚れ」という情熱的な「恋愛」感情は、婚姻の理想が崩壊しかけた時、そのまま「恋愛」に対する激しい嘲笑に変わるのである。

一方、金池と同郷で、学歴も同じく「最高学府を出た」張玉生は、無邪気に自由結婚を讃える金池を「全く嘲笑的」に眺め、「自由結婚」実現の不可能さを説いた。だが実は彼も「始めの中は、やはり理想的に結婚しようと思つて、一時は大分頑張つたんだ。が、段々事情が分かつて来たんで、とうとう親の云ふ通りに今の妻を迎へたわけ」であった。つまり張玉生もかつては理想を抱き、台湾で自由結婚を実践しようとしたのである。そのような挫折経験を持つが故に、彼は金池の言動に冷淡であったが、それは一昔前の自分に対する冷笑でもあった。「君は、まだ台湾のことを知らぬからさ」と老成を装う玉生の忠告は、金池が遭遇する挫折を予言するかのようである。事実、結婚と彼を取り巻く環境に挫折した金池も最後には「社会的に生きませう」という結論を下すに到る。金池の父は、「儂は、台湾に生れ、台湾に育つた人間なのだ。お前のやうに台湾に生れても、内地で教育を受けたやうな所謂新人とは違ふのだ。が、台湾の事情に付いては、お前はゼロだ」と怒鳴った。この言葉は、「内地」日本で十数年も過ごし、「台湾」島内の実状から乖離した新知識人の理想の脆さを示唆していると言えよう。事実、彼らの理想は台湾の現実と衝突し、挫折せざるを得なかったのである。

女性解放が熱く論じられ始めた 1920 年代、男性の新知識人は婚姻制度の改革に重心を置き、恋愛に直結した自由結婚を標榜した。一方、男性の論客とは対照的に、女子留学生の林雙随¹⁵は女子教育を重視し、家庭内の紛糾（妾問題など）から解決することを提唱した。彼女は女性解放の現場を理解しており、女性教育と自由恋愛・結婚との狭間に位置する「家庭問題」の解決を提案したのである。しかし男性知識人の理想は、女性教育と自由恋愛の彼方にある社会改革の完遂へと羽ばたいており、「家庭」という「小さな」問題は視野になかったと言えよう。だが、家族や家長との血縁や相続による繋がりこそ、「改革」の最大の難関であった。男性知識人と「新しい女性」との恋愛は、殆ど留学時期の出来事として描かれているように、「恋愛」の自由が保証されるのは「内地」日本においてであった。金池は、留学中になぜ「内地」日本の女性と結婚しなかったのかと問われた時、次のように答えて否定する。「内地」日本で結婚することは「僕個人の為めになつた」であろうが、「八十幾つの祖母さんと、両親とが居た」ため、結婚は「半分は、家の為めに」（傍点：筆者）するものだと考え、親の反対を押し切って結婚するのは「絶対に不可能だ」と。ある意味において、民族の壁を越えた「内地」日本の女性との恋愛は、自由恋愛の究極ともいえよう。しかし、台湾の新知識人は「恋愛」において封建制の象徴である「家庭」を崩壊する

代償をとうとう払えなかったのである。彼らが目指した結婚改革は、家庭との徹底した対決＝「父殺し」にまで到達しえなかったのであった¹⁶。

金池と秀恵の交際過程、則ち「盗み見一見合い一交際」から結婚に到る過程は、当時の台湾上層家庭が容認できる男女交際の上限であった¹⁷。それでも幸福な家庭生活を得られなかった金池は、カフェの女給・静子と恋愛をすることによって精神的飢餓を満たそうとする。静子は女学校を中退した女性で、金池の良き理解者として描かれている。だが、新知識人が精神的結合を自由に求めることができる（＝「恋愛」）のは、カフェの女給であり、近代以前の「恋」の対象であった玄人的な女性と何ら変わりはない。それにも関わらず、静子が金池との結婚を拒絶したおかげで、金池は「妾問題」という封建制度の共犯者になること、則ち新知識人にとっての自家撞着を免れたのである。静子という中途半端な「新しい女性」（女学校中退）との不完全な恋愛（婚姻形式からの乖離）に依存する金池は、理想と現実との矛盾に直面した新知識人の妥協性を象徴していると言えよう。

「争へぬ運命」は時事的な話題を取り入れ、作品の同時代性を図った。例えば、鳳鶯姉妹が牧逸馬『七つの海』を愛読し、映画化を待ち望む件があるが、『七つの海』単行本の広告が『台湾日日新報』に掲載されたのは1932年2月27日のことで、「争へぬ運命」連載開始の直前であった。このような現実社会との関連性は作品にリアリティを齎すと同時に、作品のメッセージを作者自身のもとして読者に訴える効果も齎すものであったと思われる。林輝焜は作品人物の張玉生や李金池と同じく京都大学留学の経験を持つ。彼が留学中に抱いた台湾社会改革への理想が島内の現実に直面して挫折する姿は、作品に描かれた「恋愛」を通して『台湾新民報』読者に訴えたとと思われる。

第3節 『フオルモサ』文芸世代：巫永福「山茶花」

前述したように「彼女は何処へ」及び「争へぬ運命」を掲載した『台湾』と『台湾新民報』は、台湾民族社会運動の指導団体である「台湾青年会」系統のもとに発行された刊行物である。そして「台湾青年会」にとって、文化と文芸運動はあくまでも民族社会運動に包摂される形で推進されてきたのである。合法的な民族啓蒙運動という立場を堅守する「台湾青年会」内部で、1923年頃から共産主義に傾倒する「社会科学研究部」が抬頭し、1928年「台湾青年会」の指導権を奪取した。左傾化とともに同会は検挙に遭い、1929年の「四・一六」事件後には壊滅状態に追い詰められた。再起を図る一部の会員が、プロレタリア文芸を志す新世代の留日台湾青年一王白淵、吳坤煌、張文環たちとともに結成したのが、1932年3月25日成立の「東京台湾文化サークル」であった。同サークルも結成の三ヵ月後に検挙に遭い解散したが、再結成を図る際にその路線を非合法から合法へと転換した。それが、文芸文化運動を中心として1933年3月に成立した「台湾芸術研究会」である。「台湾芸術研究会」の成立過程で、路線の合法や非合法に関して同人の間で確執が生じた際、「僕ら学生身分では文化サークルは学業のさまたげになると説明し承解を求め」、「大胆に文芸誌創刊の提議」をしたのは、『フオルモサ』同人では最年少（20歳）の巫永福

である。元来、巫永福は民族運動や左翼運動とは関係がなく、医学部という父の願望に反して明治大学文芸科に入学したほどの文芸志望者である。巫は「小説や詩を書き初め」、「文芸誌創刊を夢見」るために『フオルモサ』同人と接触したのであった¹⁸。そのためプロレタリア文学運動に挫折した会員が多数を占める「台湾芸術研究会」において、文芸を強く唱える巫永福は異色の存在といえる。一方、「決して偏狭的な政治、経済的思想に」囚われずに、「真の台湾人の文芸を新たに創作する」と宣言した「台湾芸術研究会」とその機関誌『フオルモサ』は¹⁹、民族運動や社会革命から「文芸」独自の道を開拓したなどの成果により、1930年代後半から終戦までの台湾文芸界に絶大な影響力を発揮していく。この点から見ると、政治運動より文芸活動に賛同する巫永福は、プロレタリア文化運動経験者が多数を占める「台湾芸術研究会」会員の中でも、見逃せない存在といえよう²⁰。

巫永福の短編小説「山茶花」²¹は、留日青年・龍雄と二人の女性をめぐる恋愛を書いた作品であり、「在日」青年の東京に起きた恋愛物語である。留学生の龍雄は月霞という「社会学を研究して居る」恋人がいたが、幼なじみの秀英と東京で再会し、恋に落ちる。積極的で自己主張の激しい月霞とは対照的に、「羞かしいさうに遠慮が多」く、「伏し目勝ち」な秀英に龍雄は惹かれていく。二人の恋愛には「同性結婚はできない」という障害があったが、龍雄は「無用な因習」と戦う決心をするに到る。「山茶花」には、理念先行の「恋愛」を掲げた「彼女は何処へ」とは異なり、嫉妬や見栄、陶醉など恋愛に纏る微妙な心理や行為がリアルに描かれている。

注目すべきは二人の女性像である。龍雄が初めに惹かれた月霞は「新しい女性」であり、その理由も「社会学を研究して居ることについては珍しく思ひ、偉く買つて居る」ためであった。月霞は知識があり活動的な女子留学生という、青年知識人の理想とする新時代の女性であり、龍雄は彼女を理想の伴侶として求めたはずであった。それにもかかわらず、龍雄の心は秀英と会う度に月霞から「離れていく」のである。

そもそも、新知識人が女性教育のスローガンを掲げ、女性に家庭からの「解放」を求めたのは、作品「彼女は何処へ」に見られるように、「女性」という同志を作り出して「社会改革」を遂行するためであった。このような功利性が先行していたため、女性が家庭内外の封建制度から脱出を謀る際、積極的な行動力と同時に必然的に生じる「反逆性」に対しては思い至らなかったようだ。彼らの理想の相手とは、自分達の社会改革を助ける同志であり、思想を分かち合う近代的知識を持つ理解者である。だが、この構図の中では、女性は依然として二次的な地位しか与えられていない。従って、女性が家父長制を脱し、更に男性への「反逆性」までも顕わすに到ると、男性知識人は狼狽の色を隠せないのである。

龍雄が秀英と再会したのは、月霞が研究のために龍雄との約束を忘れ、彼を一時間以上待たせた時であった。恋人との約束よりも自分の研究を優先させる月霞とは対照的に、秀英は自分の都合よりも龍雄の要求を優先させるのである。秀英は「羞んだ様に」笑い、「つつましやかに」食べ、苦しみをもらさず黙って涙をこぼすといった、自己を主張しない伝統的な女性として描かれている²²。龍雄は東京に来てからの八年間、帰台もせず、故郷にいた頃「兄弟の様に」親しかった秀英も含め、同郷の人々と全く交際せず、月霞が象徴するような時代の先端の雰囲気満喫してい

た。しかし秀英と再会した龍雄は、過去への思いを蘇らせるのである。つまり月霞が「時代の先端」＝「新」として龍雄を魅了した存在だったとすれば、「あどけないとぼけた」秀英は「過去の故郷」＝「台湾」がもつ「なつかしき」によって龍雄を惹きつけた存在であると言えよう。このように「恋愛」は、先端の思想を追求する留日知識人の目を再び故郷・台湾に回帰させる契機として決定的な役を果たしているのである。

以上のように、知識人の伝統回帰は「新しい女性」との「恋愛」を放棄することによって行われた。龍雄は、いくら断っても復縁を求める月霞の積極性を嫌悪するほどに、従順な秀英への思いを強めていく。月霞との別れを決意した龍雄にとって、月霞の積極的な努力は既に魅力ではなく、自分の意に反する行為＝異議申立てでしかない。つまり、本来なら新知識人が賞賛すべき「新しい女性」の行動力は、彼らの三角関係において致命的な不利を齎すものでしかない。「新しい女性」月霞の「反逆性」（積極的行動力）を拒絶し、伝統的な女性・秀英の「従順」さに惹かれた龍雄とは、新知識人の説く「女性」と「自由恋愛」の理論を反転させた存在であるといえよう。

台湾の青年知識人にとって、「内地」日本への留学は台湾島内の閉鎖的な教育・思想状況から脱出し、世界の新思潮に触れることを意味すると同時に、台湾社会からの隔離も意味していた。日本に留学した龍雄は「恋愛」の実践を通じて「台湾」から乖離する寸前にあったのである。だが、やがて台湾の伝統＝「因習」という障害に直面する。ある意味において、龍雄は「彼女は何処へ」の清風と同じ状況に置かれていると言えよう。しかし、清風が自信に満ちあふれて桂花に伝統的な結婚制度の不当性を説いたのとは異なり、龍雄は「自由恋愛」の将来を楽観視することができなかった。龍雄は「大衆が認めて居るこの不成文律は何かしらに不幸の巨岩を落として来るに違ひない」と予感し、「全く目に見えない恐怖」を感じている。それでも「僕はこんな因習を理解しやうと思はない、また理解してはならない」（傍点：筆者）と叫んで、因習を「抹殺」しようとするのである。「彼女は何処へ」における「自由恋愛」は、理念伝達の手段である一方、それさえ遂行できれば社会改革も達成できる、一種の目標、理想という一面も具えていた。「山茶花」の龍雄と「争へぬ運命」の金池にとっては、この自由恋愛の果実を摘んだ後にぶつかった「全く目に見えない」封建体制こそ、真に戦うべき標的であった。

第4節 「残されたもの」としての女性：張文環「山茶花」

巫永福と同じく『フォルモサ』の主要同人であった張文環は、奇しくも同タイトルの小説「山茶花」を、1938年に日本から帰台した二年後、1940年1月23日から5月14日まで『台湾新民報』に連載した²³。この小説は黄得時の企画による「新鋭中篇創作シリーズ」第5篇²⁴で、新聞の漢文欄廃止、1937年の『台湾新文学』停刊以後消沈していた台湾人文壇の復活を告げた記念碑的作品であった。

1.

東京を舞台に恋愛する青年男女を描いた巫永福の作品とは異なり、張文環の「山茶花」は「素朴な本島の田舎を背景」に、「賢といふ少年と、娟といふ少女を中心に、その心理的發展の過程を、凡ゆる角度から描写したもの」²⁵である（ルビ：筆者）。実際、張文環は連載前、田舎で暮らした「非常にたのしい思ひ出」を素材に「吾々の生活に近い文学」を書きたいという創作意図を語っている。雑貨店の一人息子である賢は、両親と村から出世を期待されて育ち、高等教育を受けるために故郷のRK庄から地方都市R市へ、台北から東京へと進学する。帝都東京を頂点とする当時の高等教育の道を進むことは、故郷から離れる事を意味していた。この宿命に対して賢は「都会に居れば居るほど、…かへつて田舎にみたくな」と言うのである。賢は近代文明に触れる機会を手に入れる一方、近代文明の象徴である都市文化を嫌悪する傾向をも強めていく。だが作品の最後で、彼は故郷の恋人・娟との恋を捨て、東京で留学生活を始めることが書かれて、小説は終わる。

一見、作品は新知識人の予備軍である賢の成長小説であるように見える。だが、賢は「近代化」を追求するだけの知識人として描かれているのではなく、近代と伝統の矛盾におけるアイデンティティ危機を体現する知識人としても描かれているのである。その危機を克服する手段であり、かつ彼の成長の限界を示したのも「恋愛」であった。

賢は幼い頃、従姉の錦雲に憧れていた。錦雲は学校教育を受けていないために「国語」が片言しか話せなかったが、漢文の教養があった。賢は「懐古的でロマンチック…女の標本のやうに見えて、凡べて女性の模範のやう」と、理想の女性として崇めていた。一方、後に賢の恋人になる従妹の娟は公学校で教育を受けた娘で、お転婆で勝ち気だった。賢はそんな娟を嫌っていたが、高校生になった賢が恋したのは娟であった。娟は公学校を中退すると家庭に入って家事に勤しみ、山の薪取りなどの労働も始め、学業に専念する賢とは正反対の生活を送り始める。賢の目には、かつて自分とクラスの上位を争って喧嘩した「意地つ張りで、気性のはげしい娟」が「甲斐々々しく働くやうになり、「娘らしさ」を持ち始めたように映った。更に「優しい姉の一面を再現してある」と言うように、賢は娟に、結婚してから俗っぽくなった錦雲の昔の姿＝伝統を守る女性像を重ねて思慕するのである。このような娟の生き方が示すのは、近代からの離脱（公学校から中退）は理想の女性を育て、近代への接近（女学校へ進学）は女を社会的にするという、張文環の近代と伝統にめぐる思考であると思われる。

2.

一方、賢にとって娟との「恋愛」は、近代社会への懐疑＝伝統への回帰だけではなく、新知識人が失ったアイデンティティの回復手段でもあった。作品では、幼い頃、娟が強情だったので賢が嫌ったことが書かれるが、その原因は二人が同じ性格という理由にあった。そもそも「賢」と「娟」は同じ発音である。二人は同じ公学校に通い、反発しあっていたが、やがて公学校卒業を機に正反対の道を進み出す。賢は都市へ進学し、近代文明を追求するが、娟は故郷で家庭に入り、伝統的生活を送るのである。つまり二人はネガとポジの如く、お互いの分身なのである。そして、

賢が「近代的自我」の確立を求めて孤独に陥った時、もはやお転婆ではない伝統的な生活を送る娟が現れたのであった。賢は幼少時代を思い出し、娟に「昔のまま」であるよう求める。だが、賢が求めた「昔」とは娟自身ではなく、彼が失いつつあった「故郷」との一体感、則ち過去に根ざした賢自身である。賢は村から外の世界へ出ていったが、それは同時に、土地に密着した「時間」の喪失でもあった。その「残されたもの」²⁶の象徴が娟に他ならない。つまり賢にとって娟は、近代社会に参入する際に喪失せざるを得ない、もう一人の自分でなければならない。そして娟との「恋愛」＝精神的結合は、欠落した自己の完成、アイデンティティの完成を意味するのである。則ち賢にとって「恋愛」は人格を完成させる手段であったと言えよう。

但し、娟は賢の欠落を補完する工具に留まったわけではない。娟もまた小説の有機的部分を担う人物である。娟は家庭の束縛から脱出して都会に行く夢を抱えていた。そのため、賢が求める伝統的な意向と、都会にいる賢を頼りに自由を獲得しようとする娟の夢とは噛み合わず、二人はすれ違ってゆく。二人の断絶の決定的な原因は、近代教育の理念を娟や錦雲に強要する賢の理屈であった。例えば賢は、家が決めた婚約を受け入れた錦雲に対して、「姉さん、あなたの考へてゐる事は要するに片寄つてゐるのです。それも、あなたは教育をうけてゐないから、あなたの考へてゐることは、延びないでちぢこまつてゐる。……しかしそれは哲学と云ふ問題になるのです。」と言う。賢が頻りに「哲学」という非日常的な言葉を用いて、価値観の異なる相手に対して一方的に「高説」を述べる様は、近代文明の権威を笠に着ているようでもある。だが、その直後に「そのときの賢の中学には、哲学の言葉が流行つて、一とグループの文学青年を悩ましてゐるからである。無論哲学は何物であるかは知らない。……お終ひには人生に関する問題の追求がわからなくなつて自殺をすると云ふ事だけは知つてゐる」と語り手の揶揄が続く。20年代以降、新知識人はメディアを通じて「恋愛改革」のブームを起こしたように見えるが、家族制度の封建性は容易に改革できるものではない。例えば『台湾日日新報』の「婦人と家庭」版²⁷には、「婦人合理化 婦毎論客の気焔集」²⁸と言う女性改革の記事と、貧困のため売春宿に売られる寸前の元女学生の投書「身の上相談 魔窟へ売られやうとしてゐる私」という記事が並んでおり、示唆的である。錦雲と娟もまた、結婚相手を選ぶ自由を与えられず、家によって生涯が決められるという女性の宿命に直面したが、理念先行の賢は現状を顧みず、一方的に理想を説くだけである。そして「僕達は恋だけではいけないのだ。自分達の生活を建設しなくてはいけない」と自己中心的な言葉を残し、娟を助けることなく、夢を追いかけて東京に向かうのであった。

こうして、娟は再び「残された」窮境に陥る。娟は「彼女は何処へ」の桂花と同じく青年知識人の夢の犠牲となった。だが桂花のように、女性ないし社会全体の将来のために奮闘する女性に変身することは、娟にはありえなかった。桂花の積極的な変身の背後には、伝統体制下の婚姻制度に苦しむ女性全体に対して、自力で束縛から脱出する可能性を示唆する意図が潜んでいる。それに対して、娟にこのような積極性を賦与しない「山茶花」は、文学から示唆、教化などの実用性を抜き取ったといえる。この点は、前述した「台湾芸術研究会」が台湾新文学を民族社会運動から「文芸」独自の発展を遂げさせたことの実践として見てよかろう。張文環はまさに「台湾芸術研究会」の主力会員である。しかし、人生の分岐点に立たせられた娟の行方は、小説では語ら

れない。思えば、張文環の処女作「落蕾」²⁹のヒロイン秀英も、東京留学に向かった恋人義山の子を身ごもって故郷に残されるのであった。秀英が義山の夢の障害にならぬよう自殺することを考えるという結末は、「山茶花」との類似性が見られる。このような、作品のヒロイン達が体現する台湾社会における女性の過酷な現実、賢／娟、義山／秀英の決定的な断絶（それは社会における女性の自立と密接に関連している）、そして賢という一人の男性知識人が見せるエゴに対する語り手の揶揄から、張文環の問題意識をうかがうことができよう。だが残念ながら、張文環は作品において問題を解決する努力を放棄している。「恋愛」のヒロインは「残されたもの」のままであった。

1920年代以来、知識人が「恋愛」言説において語ってきた「恋愛」と「新しい女性」との連帯は、40年の作品「山茶花」によって切断されたと言えよう。40年代の知識人にとって「恋愛」はもはや「新しい女性」を求める実践行為でないばかりか、「恋愛」は「近代」の挫折を意味するものとさえなった³⁰。作品「山茶花」の時代的意義はここにある。新知識人・賢の「恋」対象はもはや都市の女学生ではなく（賢の周囲には女学校に進学した嬋がいた）、故郷の「田舎娘」の従妹・娟であった。

新知識人が描いた「玄人（カフェの女給）」と「従姉妹」という「恋」の相手は、古典白話小説でお馴染みの、古来より知識人が想像したヒロインの典型であった。「争へぬ運命」における主人公とカフェの女給との恋愛が、「新しい女性」との「自由恋愛」の挫折を表しているならば、最初から「新しい女性」を恋愛対象から外し、従姉妹との恋愛を描いた「山茶花」は、前近代への後退とも言えよう。従姉妹・伝統的女性への思慕は、呂赫若の作品³¹にも見ることができる。実際、「新しい女性」と「恋愛」する青年が多く描かれた30年代とは対照的に、40年代に入ると「恋愛」を書いた作品は著しく減少する。この点に関しては、1940年代の台湾文学には「恋愛」のほかに、呂赫若「風水」、「財子寿」のような家族制度の腐敗への批判、周金波「志願兵」のような戦時下の知識人と国家権力の関係への探究など、1930年代より多くの題材と問題が作家の視野に進入してきたことが原因の一つとして推測されているが、その具体的な検討にはさらに精密な論考が必要であろう。

むすびにかえて

戦前の台湾文学における〈新しい女性〉像を問おうとすると、明確な女性像が浮かばないことに気づかされる。実際、中国五・四新文学における丁玲『莎菲女士的日記』の莎菲や、明治文学における有島武郎『或る女』の早月葉子のような自立を志向する鮮明な女性像は台湾文学には希薄である。その理由の一つとして、当時の台湾男性新知識人が「恋愛」を唱える際、改革の現場である台湾に根強く残る封建性を問うことなく、急進的理想的な提唱に走った結果、創作における女性像の空洞化がもたらされたことは見落としてはなるまい。

以上本稿は1920～30年代に発表された留日男性知識人の手による四篇の作品を検討することにより、当時の男性知識人による「恋愛」想像の実体、そして従来見逃されていた「恋愛」想像

に潜む「空洞化した女性像」の一側面および男性知識人の過度な理念性・急進性の一端を明らかにした。しかしこれはあくまでも「一側面」にすぎず、台湾文学における「女性像」の全面的な解明には、文芸活動に従事する〈女性の表現者〉と、男性作家による〈文学に表現された女性〉の両方を検討する事が必要であろう。だが女性による文学活動は日本統治期の台湾ではそもそも少なく、たとえば葉石濤『台湾文学史』（中島利郎、澤井律之訳、研文出版、2000年）においても、女性作家として紹介されているのは黄鳳姿(1928～)、楊千鶴(1921～)など2名のみである。黄鳳姿は民俗関係の散文の単行本を上梓したが、当時僅か12歳である。また楊千鶴が戦前に発表したのは少数のエッセーと小説のみであり、黄鳳姿と同様に一人立ちした「作家」に数えられるかどうか、疑問の余地が残る。他に台湾原住民の生活を題材にした坂口袴子(1914～)は注目されているが、坂口は日本人で（日本統治期には「内地人」と称される）、本稿が対象とする台湾人作家ではない。また作品はたとえ女性の名前で発表されていても、男性作家が女性風ペンネームを用いた場合もあり（池田敏雄がそうであるように）、確かに台湾人女性による創作であるか否かの慎重な検証も必要とされる。

そのために本稿では留日男性知識人が新聞、雑誌に発表した作品に限定して論じたが、「女性」イメージを操作し「文芸」の使命を果たそうとする男性知識人の矛盾は、この作業により明らかになったといえよう。そして張文環「山茶花」の後に展開する1940年代の台湾文学には、張文環と呂赫若らの作家たちにより、啓蒙運動の陰で犠牲にされていた台湾女性の個性を見つめ、男性知識人の理想と女性の現実との溝を描き始めることになる。そのような男性作家の作風の深化は、やがて訪れる1940年代台湾文学を大きく変えていくことであろう。この問題については別稿において検討したい。

注

- 1 『フォルモサ』第3号、1934年6月
- 2 『台湾文芸』2巻5号、1935年5月
- 3 本稿における「新しい女性」の定義は洪郁如『近代台湾女性史』（勁草書房、2001年）に従った。則ち、「纏足の旧慣から脱却し、日本による新式教育を受けた」（同書14頁）女性層であり、新教育を受けず、或いは伝統的な漢学教育を受けた一部の女性と対極的な存在であると規定される。
- 4 孟悦、戴錦華『浮出歴史地表』（河南人民出版社、1989年。尚、同序言の日本語訳「歴史の地表に浮かび出る」は秋山洋子編『中国の女性学：平等幻想に挑む』勁草書房、1998年に所収）は中国現代文学作品における女性像を系列的に分析することで、従来、男性は政治を操るが故に歴史を語る権力を独占してきたのに対し、女性は歴史から声を消された存在であったと論じる力作である。女性が封印された歴史の暗黒から自らの存在を明らかにしていく過程を、同書は題名と同じ「浮上歴史地表」という言葉で表現したが、本稿でもこれにちなんで「歴史の地表」との表現を用いた。
- 5 『台湾』第三年第四号～第七号、1922年7月10日～10月6日
- 6 鍾肇政、葉石濤編『光復前台湾文学全集 一桿秤仔』（遠景出版、1979年）は「彼女は何処へ」の中国語訳を収録し、同作品について「台湾新文学史の中に、現在分かっている範囲で小説の第一作である」と紹介している。（同書1頁。原文：「在台湾新文学史上，據我們所知，追風的「她要往何處去」是第一篇小説」。また陳芳明『左翼台湾』（麦田出版、1998年）には、「小説においても詩においても、台湾新文学は謝春木（追風）を以って始められた。謝春木の詩（「詩の真似」）と小説（「彼女は何処へ」）はともに1922年の『台湾』に掲載された」と記されている。（同書30頁。原文：「台

- 灣新文學的起點・無論是小説或新詩・都是從謝春木(追風)開始的。謝春木的詩(詩的模仿)・以及小説(她要往何處去)都是發表於1922年的《台灣》雜誌上)。しかし陳万益氏の考察によれば、「台湾文化協会」の刊行した『台湾文化叢書』に掲載された「可怕的沈黙」こそ、台湾新文学史最初の小説である。(陳万益「于無聲處聽雷・析論台灣第一篇小説可怕的沈黙」、『中國現代文學國際研討會論文集』、1995年)
- 7 『台湾社会運動史』(台湾總督府警務局發行『台湾總督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安狀況(中巻)』1939年 により復刻、龍溪書舎、1973年)、25頁
- 8 河原功『台湾新文学運動の展開』(研文出版、1997年)、137～139頁
- 9 柳書琴『荆棘之道:旅日青年的文學活動與文化抗爭』(国立清華大学博士論文、2001年)を参照。
- 10 この定義は河原功『台湾新文学運動の展開』(研文出版、1997年、130頁)の見解に従うものである。河原氏は、1922～1931年の台湾文学運動の特徴は「運動として独立したものでなく、あくまでも社会運動に包摂されていた」(同書129頁)と文学の工具性を述べている。このような視点から、「彼女は何処へ」に現れた女性イメージの操作が理解できよう。
- 11 張恒豪「追風及其小説『她要往何處去』」(『国文天地』77、台湾国文天地社、1991年10月)。2004年6月5日、日本台湾学会第六回学術大会(東京大学山上会館にて)第二分科会コメンテーター・中島利郎教授の当日より引用。本論文は日本台湾学会第六回学術大会での発表原稿を改訂したものであるが、学会発表の際、中島利郎先生から大きな示唆を受けた。
- 12 1933年4月1日自費出版、『台湾新民報』1932年7月以降、約七ヶ月の間170回ほど連載。なお、小論ではテキストとして『日本統治期台湾文学集成3 台湾長篇小説集三』(河原功編、緑蔭書房、2002)を使用した。
- 13 林輝焜の蔵書については河原功「林輝焜『争へぬ運命』解説」(『日本統治期台湾文学集成3 台湾長篇小説集三』、緑蔭書房、2002)を参照。
- 14 林輝焜「筆後記」『争へぬ運命』(自費出版、1933年4月)、前掲『日本統治期台湾文学集成3 台湾長篇小説集三』による。
- 15 1900～1967、台湾屈指の名望家一霧峰林家に生まれ、1907年に父に連れられて日本へ赴き、青山女学院高等女学部卒業。台湾最初の医学博士である杜聡明の夫人でもある。杜聡明『回憶録』(龍文出版、2001年)を参照。
- 16 但し、これは台湾のみの現象ではなく、同時代の中国、そして日本の女性解放も或る意味で不完全に終わった。これに対する検証は別稿に譲りたい。
- 17 洪郁如『近代台湾女性史』(勁草書房、2001年)228頁
- 18 「下村作次郎宛て 1998年4月3日付け巫永福氏の書簡」(下村作次郎「台湾芸術研究会の結成」付録、『左連研究』5、1999年10月)
- 19 「台湾芸術研究会」結成の檄文「同志諸君！」(『台湾社会運動史』(台湾總督府警務局發行『台湾總督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安狀況(中巻)』1939年 により復刻、龍溪書舎、1973年)、59頁
- 20 「台湾芸術研究会」の結成及び1930年代の台湾文芸界との関係については、別稿にて論じる予定。
- 21 『台湾文芸』1935年4月。巫永福の帰台は1935年4月であったが、作品末に「1934年11月25日—27日」という記載があるため、東京で執筆した作品とみられる。なお、小論ではテキストとして『日本統治期台湾文学集成5 台湾純文学集一』(星名宏修編、緑蔭書房、2002年)を使用した。
- 22 秀英が東京に来る目的も明かにされていない。
- 23 小論はテキストとして『日本統治期台湾文学集成2 台湾長篇小説集二』(中島利郎編、緑蔭書房、2002年)を使用した。
- 24 同シリーズには翁鬧「港のある町」、王昶雄「淡水河の漣」、呂赫若「季節凶鑑」、龍瑛宗「趙婦人の戯画」、陳垂映「鳳凰花」、中山ちゑ「水鬼」など全九篇があったと言う。黄得時「輓近の台湾文学運動史」(『台湾文学』2巻4号、1942年10月)
- 25 「新鋭中篇創作第五篇 明後日より愈よ連載」(『台湾新民報』、1940年1月21日)
- 26 「山茶花」の小題より引用。ここでは娟が公学校を中退した前後の出来事が描かれる。
- 27 『台湾日日新報』、1932年2月3日
- 28 婦人毎日新聞社主催の「婦人合理化大会」が台北で行われ、その講演の内容を報道した記事。
- 29 『フォルモサ』創刊号、1933年7月

-
- ³⁰ 本稿では張文環「山茶花」を「恋愛」の視点から検討したが、一方「山茶花」は張文環の近代文明に対する批判、及び伝統文化への回帰した過程において位置づけることも可能である。それについては小論「立身出世を求める青年たち—『風俗作家』張文環新論」（『日本台湾学会報』第4号、2002年7月）で究明したことを試みた。
- ³¹ 「廟庭」（『台湾時報』272号、1942年8月）、「月夜」（『台湾文学』3巻1号、1943年1月）。詳しくは垂水千恵『呂赫若研究』（風間書房、2002年）を参照のこと。